星はらはらと

――二葉亭四迷の明治――

第十七回

太田 治子

二葉亭四迷が両親と共に神田仲猿楽町九番地へ住まいを定めたのは、明治十八（一八八五）年五月のことだった。父の吉数（よしかず）が福島の役所を三等主税属で非職となり、帰京した。二葉亭が学業優等品行端正により五ヶ月間毎月六円の学資が支給されるようになってから、二ヶ月がたっていた。父の毎月の恩給は、十一円である。一人息子の辰之助の卒業は、すぐ目の前に迫っていた。吉数は、とびきりできのいい辰之助が東京外国語学校を卒業後、更に帝国大学へいくことを勧めたという。初代文部大臣森有礼によりそれまでの東京大学は、帝国大学と改称されることになった。よもやその十九年の年明け早々に自主退学することになるとは、思ってもみなかっただろう。

「家計不如意のため、本人の扶助を要する」という表向きの退学の理由は、何事にも穏便なることを願う吉数が考えたものといえそうだった。二葉亭は清韓語と共に露語科が廃止されて、商業学校に合併されることが何としても我慢できなかった。予期せぬ息子の退学に、吉数のショックは如何ばかりであったろう。しかしこの子には、語学を天職とする道が開けている。ロシア語の他に英語も勉強することだ。神田仲猿楽町の新しい住まいにある立派な土蔵は、息子の書斎にぴったりだ、ここは息子を信じよう。そのように思い直したのではないか。吉数にも、二葉亭と同じような太っ腹なところがあった。いくばくかの公債があるとはいえ、乏しい年金暮らしには不相応な大きい土蔵付きの家だった。これでは、息子の稼ぎをあてにしていると思われても致しかたなかった。作家の山田美妙は、当時の吉数と二葉亭父子の関係に危惧を覚えていた。吉数と美妙の父親はかつて西南戦争のころに島根県で出合っていた。吉数は県の役人、美妙の父親は県の警部長の役職にあった。二葉亭より四歳年下の美妙は、小さいころからの彼をよく知っていた。「無類という程の滑稽好き」であったという。しかも辰之助時代の二葉亭は、よく踊ったというのである。「……踊ったも踊った、馬鹿囃子（ばかばやし）が得意であった。仮面（めん）を被（かぶ）ってヒヨットコ踊りをすると共に悪太郎等糠星（ぬかぼし）どもをして、殆ど喝采の手を麻痺（まひ）させた。」（「二葉亭四迷君」、坪内逍遥・内田魯庵編『二葉亭四迷』）

喉自慢の二葉亭が踊りも得意であったとは、意外な気がする。明治二十（一八八七）年四月の鹿鳴館仮装舞踏会にもし若輩の身で紛れ込んでいたとしたら、それは見事に盛装のマダム連をエスコートできたことだろう。かろやかな二葉亭のステップに、主催者の伊藤博文も外相の井上馨も目をみはったのに違いない。しかし、二葉亭がそのような政府主催の外国におもねるばかりの珍妙な舞踏会にのこのこと現れる筈がなかった。少年時代のヒョットコ踊りは、人を楽しませると共に彼自身が楽しんでいたものだった。人にへつらったり、おもねる気持は、皆無だったと思うのである。二葉亭には生まれながらにして、「コメディアン」の素質があった。それは、えもいわれぬ愛敬よしの吉数以上のものであったと美妙は回想している。快活さを通り越して、滑稽となっていた。しかし神田仲猿楽町時代の二葉亭は、美妙の目にまったく変わってしまって、炭が氷と変化した程にみえたという。吉数がそのさびのある美声で長唄でも歌おうとすると、ドストエフスキーか何かに頭脳を刺激された二葉亭は陰気極まる白眼で父親をみたのに相違ないと美妙は考えた。しかし、これは大分違っているのではないだろうか。彼は土蔵でも、時として清元や小唄などを唸っていた時があったように思うのである。外国語学校時代も友だちの前で一節唸ることが、一番の息抜きとなっていた。

おおた・はるこ●神奈川県生まれ。近著に『石の花 林芙美子の真実』『時こそ今は』（ともに筑摩書房）、『明るい方へ 父・太宰治と母・太田静子』『夢さめみれば 日本近代洋画の父・浅井忠』（ともに朝日新聞出版）など。